第　６７号

平成２１年４月１日発行

寿楽院寺報

〒369-1245 深谷市荒川９８３
高野山真言宗　荒澤山 寿 楽 院
住 職　髙 橋 敬 行
電話　048-584-0302

天上天下唯我独尊（てんじょうてんげゆいがどくそん）

四月八日は仏教の開祖、お釈迦さまの誕生を祝う「花まつり」の日です。

今から二五〇〇年ほど前、インドの（今はネパール）ヒマラヤのふもと、カピラ城というお城近くの、ルンビニーの花園でお釈迦さまはお生まれになりました。天も大変によろこんで、その時、甘露の雨をお釈迦さまにふりそそいだといいます。ですから、それにちなんで花まつりでは、誕生仏にみんなで甘茶をかけるのです。

それから「花まつり」では、白い象をつくって子供達が引いたりもしますが、これはお釈迦さまのお母さんのマーヤ夫人が、白い象が胎内にはいる夢をみてお釈迦さまをみごもったという、その言い伝えにもとづいているんです。当時は白い象の夢は尊い方が生まれるしるしと信じられていました。

生まれたばかりのお釈迦さまは、すぐに七歩歩かれ、右手で天をさし左手で地をさして「天上天下唯我独尊」、この宇宙の中で唯だ我れ独り尊い、と声高らかに宣言されたといいます。これはもちろん「この世の中で自分だけが唯だ一人えらいんだ」ということではないですね。「人間としての大いなる自覚、大いなる悟りにおいて、我れよりまされる聖者なし」ということ、そして「この上ない最尊・最上の道は、誰の前にも平等に開かれてある」ということをしめされたのです。

ところで、お釈迦さまが生まれてすぐに七歩歩かれたというのは象徴的です。「七」は「六」より一つ多いということ、つまり、迷いの世界をぐるぐるめぐっている六道輪廻の我々の世界を、すでに一歩越えられた人であるということを、その生まれにまでさかのぼり、誕生に託して示したわけです。

たったの一歩ですが、何事もその一歩を踏みだすのが難しいんですね。

四月八日は、『花まつり』です。
（お釈迦様の誕生日）
甘茶を用意してあります。
お参りください

逝去（せいきょ）

仏教が生んだ日本語

逝去は、人の死を悼む尊敬語として使われている。しかし、仏教では死とは「逝去」である。逝去のことを「入滅」とも「涅槃（ねはん）」ともいう。無量無数の因縁によってただ今の瞬間の命が生かされているという縁起の事実への目覚めを基本とする仏教では、ただ今の私を私たらしめていた全ての因縁が、過ぎ去って（逝去して）寂滅したのが死である。

空海の言葉　シリーズ

道の興廃は人の時と時に非ざるとなり

●●●道理が興ったり廃（すた）れたりするのは、その時代時代の人が、時の流れを見て、正しい判断に基づく人間関係や間違った判断に元づく人間関係の結果である。

電車やバスの中で、若い人が年寄りに席をゆずろうとしない無理。

労働時間がどんどん短くなりました。官庁も銀行も週休二日になり、週休三日の会社も出てきました。いまに週休五日制の会社が現われるかもしれません。働くことが悪いことのような無理。

まだまだ身の周りには無理が通っていることがたくさんあります。

自分が楽しく快適に毎日を過ごそう、と思ったら、他人もそう考えています。他人を蹴落としてでも自分だけ楽しもう、とするのは、奴隷時代の古い間違った考えです。

一九九二年四月、ロスアンゼルスで黒人の暴動が起こりました。白人は、何百年間も黒人を家畜以下に扱うという無理をしてきました。その罰が当たったのです。

弘法さんのいわれるとおり、現代に生きる我われは、正しい判断に基づいて毎日を過ごしていきたいものです。